

共産主義と心理学

アルフレッド・アドラー
野田俊作訳 (大阪)

要旨

キーワード :

第一次大戦に敗れて

権力的手段はわれわれドイツ人から剥奪されました。われわれは他民族への支配を断念しましたし、どのようにしてチェコやユーゴスラビアやハンガリーやポーランドやルーマニアが自分たちの国力を強め、新しい独立した生活を始めるかを、妬みも嫉妬もなく見えています。停戦後の荒廃とひどい飢餓から立ち直るにはどうすればいいかを、心を痛めながら考えるとき、相互協力関係を阻害していた人為的におおられて作られた以前からの憎しみは、あつというまにすべて消え失せ、われわれは彼らにたいして兄弟愛にみちた考え方をもてるようになりました。われわれドイツ人に生気を吹き込み、われわれドイツ人を神聖なものにするのは、共同体の強い感情であります。その感情はいまや国境を越えて、希望に満ちた喜ばしい全人類性の感覚 *Allmenschheitsempfinden* として、われわれの中に座をしめるようになりました。

しかしなお、古い不信の念がわれわれを邪魔しますし、なおわれわれは外国による支配と国内に潜む暴力的な権力渴望とを怖れています。しかし、人類の連帯が可能になること、そのためにのおおのが犠牲を払うことについて、われわれは準備ができているように感じています。われわれ国民を敗北が打ち負かしてしまったわけではありません。勝者の額を飾る月桂冠がわれわれの心を痛ませることはありません。われわれは長い間幻惑されてきましたが、今や知るようになりました。現在の苦難の中にあっても、不幸の中にあっても、われわれ罪なき国民の上に新しい認識の星が輝いています。すなわち、「権力の頂点にいるときに較べてより不幸なわけではない。支配を追求することは不幸な運命が約束されたまやかしかでしかなく、人類の共同生活に毒を盛るものだ。共同体が志されるとき、権力の追求は断念されるべきである」という認識です。

われわれは勝者よりもこの真理の近くにいます。他国の脅かしによる突然の没落をわれわれは経験しました。他のいかなる国民よりも先に、われわれは人々に布告しなければならない幸福についての新しい教訓を受け取りました。すなわち、恐怖と悲嘆にみちたこれまでの人類の歴史は、権力のうまくいかない追求のたえまない連鎖にほかならないということです。われわれの国民のこの深い不幸は、しっかり研究されなければなりません。さもなければ国民は唯一の意味のある目標を見失ってしまいます。苦痛に満ちた体験を通じて、新生ドイツは、すべての文化のもっとも深い理念を生み出しました。それは、権力の追求を最終的に拒否することと、指導理念としての共同体精神 *Gemeinsinn* を最終的に高揚することです。

バベルの塔を作ろうという残忍な大騒ぎがまたもや人類を惑わしています。そうではなくて、いまや不幸をもとに内省すべきときです。国民は本来はいつも共同体精神に向かう道の上にあります。すべての精神的な、すべての宗教的な高揚は、権力の追求に反対する道を歩んでいました。

共同体感覚の悪用

しかし、人類の共同生活への道に関する論理は、いつも支配欲の中で終わることでもって、砕け散りました。過去の社会的な正義のための試みはすべて、たとえばモーゼの契約の板であれ、キリストの教えであれ、いつも権力欲に燃えた階級や集団の手に落ちて、もっとも神聖なものが彼らの支配欲を満たす目的で悪用されました。きわめて精選された人工的偽物、あらゆる工夫を凝らされたごまかしや悪巧みが持ち込まれました。そして、たえず浮かんでくる共同体感覚 *Geninschaftsgefühl* にもとづく感情や思考を、権力追求の道にねじ曲げ、それを人々の幸福のためには役に立たないものに作りかえたのです。人間の共同生活の要求から創り出された真理と必要性は、いつもいつも支配渴望によって不自然なものに改造されました。「真理を通じて虚偽へ！」というのが、従来の権力文化のもっとも深い意味であり、それによって、いまや恐るべき全般的崩壊が起ころうとしています。権力の追求を通じて、共同体感覚の致命的な悪用が起こっているのです。

権力への誘惑が、少数とはいえ熱心な追随者や信奉者を見つけることについて、いったいどう説明すればいいのでしょうか。それは骨がらみの支配欲というものがあるということにほかなりません。支配欲は権力に心をそそられた内なる信念から出てくるものです。なぜなら支配欲は、それを持っている者が暴力性を増加させるにともなって、自分の権力が増大するだろうと期待しているからです。

資本主義の時代においては、他者を圧倒したいという渴望が大きくなるにつれて、人間の心の中にある強奪の楽しみが際限なくあおられてきました。われわれの精神装置がすべて権力追求の魔力にとらわれてしまっているということは、驚くべきことではありません。科学は、近視眼的でいつもあまりにもお人好しなのですが、俗流心理学や性格学がそう考えたように、支配欲や権力の追求や優越の追求や私的な名誉欲やエゴイズムを、人間精神の生まれながらの変えることのできない個性であるかのように説明しました。しかし、その説明の結果、支配欲などをかえって保護育成しましたし、共同体感覚を通じてそれらを解体することを邪魔することになってしまいました。共同体感覚は、本来のあり方とは反対に、目的から手段に転化させられ、国家主義と帝国主義に奉仕することになりましたし、共同体精神の真理は、支配欲と権力渴望に関する策略と悪意を応援することになってしまったのです。

社会主義と権力

ただ社会主義のなかにおいてのみ、妨げることのできない人間の共同生活の要求のための最終的な目標という形で、共同体精神はもとの形をとどめています。すべての天才的な社会主義的ユートピア論者は、新しいシステムを探求し発見する際に、すべての人間性の偉大な改革者と同様に、本能的に、力をめぐる争いよりも相互援助を上位において考えました。そしてカール・マルクスは、精神生活のメカニズムの中に、支配階級に対するプロレタリアートの連帯した戦いがあることを発見しました。彼はその戦いをプロレタリアートたちの意識にのぼらせ、共同体感覚の最終

的な実現への道のうちのひとつを示しました。プロレタリアートの独裁は、プロレタリアートの成熟と能力の実現でなければならず、階級闘争と権力追求からの全面的な解放に導くものでなければなりません。

多くの社会主義者は、ボルシェヴィズム、すなわちレーニンのロシア共産主義、がいま重大な局面で暴力的に社会主義を貫徹しようとしていることについて、それはそれで理解できる考え方であるかのように思っています。すべての善いものや幸福を約束するものを、あるいはせめて、止めることのできない進化であると思われるものだけでも、権力という方法でもって創り出すことが、もっとも簡単な道であるように見えるということは、われわれもしぶしぶ認めます。しかし、人間の生活あるいは人間の歴史の中で、このような企てが成功したことがあるのでしょうか？

われわれの見る限り、穏やかな暴力の使用でさえ反抗心を起こしますし、下位になるように強制された者たちの幸福がそのとき犠牲にされているということはあきらかです。

絶対主義的な家父長的システムはとんでもない結果を生むものです。そのような絶対主義社会でまつられる絶対神としての支配者には、どのような国民も反抗心なしで耐えることはできません。個人であれ国民であれ、他人の権力の範囲内にとりこまれたと感じれば、おおっぴらであれ密かにであれ、ただちに抵抗に向かって動くでしょうし、すべての鎖から解き放たれるまでその抵抗は終わらないでしょう。資本主義の拘束に対するプロレタリアートの闘争の様子を見てみると、あきらかにこの変化の道筋が見てとれます。じっさい、労働組合の権力が増大してそれが乱用されるようになると、程度は様々ですが、内部から抵抗運動がおこります。そのようにして権力の問題が闘争にまでなったときには、もともともっていた崇高な意図や重要な目的は忘れられてしまい、権力への意志 *Wille zur Macht* が人々を突き動かして、内輪もめが起こるのです。

このような内輪もめは、抽象的な理想と実際的な共同体の要求がどのような関係にあるのかについて考えるためのいいヒントになります。なぜなら内輪もめは、それらが矛盾して、集団意識が持続的に圧力にさらされて共鳴したときに起こってくるからです。われわれの精神器官は、外からの圧力には内からの対抗圧力で応えますし、服従し忍耐することで報酬をもらっても満足することはなく、かえって権力の手段を用いて自分の方が強いことを立証しようとするのです。権力をめぐる戦いは、それゆえ心理学的な側面をもっていて、それを描写することは今日のわれわれの緊急の責務なのです。

世界のすべての富、人生の喜び、労働者の賃金などは、権力でもって継続的に維持することはできません。それは権力が共同体の向上を目的として追求しているように見えるときでも同じことなのです。中央集権的な軍国主義は崩壊するに違いありません。なぜならば、軍国主義はそれによって奴隷化された人たちを刺激して抵抗に向かわせるからです。それは時間の問題であるにすぎません。

権力の心理学

このような、個人あるいは集団による権力支配への抵抗は、もっとも鋭くもっとも明確に、個人心理学の正しさを証明してくれました。今日の人々の思考・感情・意図は、なによりもまず、その人の優越性の追求に向かう線に導かれており、たとえその人がより高い理想に仕えているのだと信じていても、実際には私的な優越追求にすぎないのです。権力への渴望は、子ども時代に自分が弱いと感じたときの感覚の耐え難さに起源をもっています。それは、そのような子どもの不確実感を止揚するための上部構造としてできてきたのです。そのような権力渴望に対して、共同体のために努力すること *Gemeinschaftsbestrebungen* がどうしても必要であるという経験が一方

にあって、争いを挑みます。しかし、われわれの文化とわれわれの洞察の今日の状態は、いまなお権力原理を許しており、ひそかに共同体感覚の影に隠れて、人は権力追求を貫徹させているのです。

おおっぴらで直線的な押し込み強盗的な暴力の使用は評判が悪いし、今ではすでに難しくなっていますし、ヒステリックな性質の同情心をもった人々に糾弾されるでしょう。それゆえ、しばしば暴力沙汰は、正義や道徳や自由をひきあいに出し、抑圧された者たちの幸福のためにという口実で、文化の名のもとにおこなわれます。

国民の経験では、権力政治は、権力者だけでなく、その支持者にも権力陶酔を生み出します。支持者たちはかつては反対者であったのですが、権力を得るために支持者となったのです。あるいは、反対者は、もし自動的に反抗的になってしまうということがなかったならば、実は支持者にもなりえた人たちなのです。権力から排除された者たちは革命を待ち望み、自分たちが権力を得るために言いたい放題を言いつのりします。

両親の生活の中に支配欲の毒はこっそり入り込み、親の権威と子どもの義務の名の下に、優越性と不可謬性の光を確保しておこうと試みます。そこでその毒を子どもはとりこみ、親たちを乗り越えて片づけてしまおうということになります。教師についても同じことです。男女間の愛もまたこのような悪意で満たされて、相手の全面的な降伏を要求するのです。男性の権力願望は「自然の摂理」を口実にして女性の征服を切望するのです。その結果として、悲しいことに、すべての無邪気な関係性は破壊され、価値のある能力は麻痺してしまいます。子どもたちの愛らしい遊びでさえ、心理学者にこっそりと、支配欲を満足させるための統一的なシステムがあることを教えるのです。

これについて現代心理学は、他者への支配欲と野心と権力追及の行列は、その醜い随伴現象のすべてとともに、生まれつきでもなければ変えられないものでもないことを示してくれています。それらは子どもがまだ小さい頃に接種されたものであり、権力欲に酩酊した周囲の雰囲気から子どもが知らず知らずのうちに受け取ったものなのです。われわれの血の中にはなお権力陶酔へのあこがれがありますし、われわれの精神の中には支配欲のお手玉があります。しかしひとつのことがわれわれを救います。すなわち、それらは最も根本的なものではないということです。われわれの強さは、それらではなくて、信念の中に、組織的する力の中に、世界観の中にあるのであって、武器による暴力の中にも仮借のない法律の中にあるのでもありません。

ボルシェヴィキ支配の運命

ボルシェヴィキの支配は、これまでのすべての政府と同じように、権力を独占することにもとづいています。そのことから彼らの運命は語られるべきです。権力陶酔が彼らをそそのかしたのです。これまでこのことについてあまり考えたことのない人々の心の中にも、自動的にその運動の恐ろしいメカニズムが見えてくるでしょう。彼らに反対する人たちが反撃を加えることでもって彼らの運動に反応するでしょうが、そのときには共同体の目的は忘れられて、ただ両方の側の権力の意志が彼らをせめたてるので、戦いが起こるのです。基本的には、まるでキイチゴのように安っぽく、運動への反動としてすべてが正当化されるのです。すでに醜くなっています。醜いですよ、すでに。

実際、ボルシェヴィズムについての悪い噂は前代未聞のもので、その噂をボルシェヴィズムは一度も反論したことがありません。なぜなら、その噂よりもっと悪いものを、権力を生み出すために彼らは戦場に持ち込むからです。全ロシアは崩壊してしまいました。すでにある人たちは、

ボルシェヴィキがヨーロッパ全域の征服を考えているというキャンペーンをはじめています。そう言われると、ボルシェヴィキは、自分たちの権力を新しくより強化することでもって、それに応えるに違いありません。いまだに権力陶醉に屈伏していない人は問うべきであります。すなわち、いったいこのような道のかなたに人類の統一だの共同体感覚の強化だのが待っているのだろうか。

われわれは、誠実で道をわきまえた古くからのロシアの友人たちが、目のくらむような高みに上り詰めたのを見えています。権力衝動にそそのかされて、彼らは暴力への要求をあらゆる場所で目覚めさせてしまいました。権力が最終的な言葉として語られてしまうような場所では、暴力の縮小はありえず、これまでのようにたださらなる拡張があるだけです。手段さえあれば暴力が使われるとき、共同体感覚の奇跡はただの思い出でしかなくなってしまいます。権力の使用でもってそれはけっして実現することはないのです。

われわれボルシェヴィキでない側の人間は、われわれの最高の目的、すなわち共同体感覚の育成と強化のための方法と作戦を考え出さなければなりません。これは、主体と客体の間のむかしながらの対立の問題です。誰一人として客体でありたい人はいません。子どもや大人を教育するときに、無理やりになにかさせようとするやりかたはかならず失敗します。清潔の習慣をつけようとか、食べ物をちゃんと食べるようにさせようとかいうことでさえ、親が権力でもって命令するなら、あるいは子どもがすでに支配をめぐる戦いに入っているときには、子どもの活発な反抗を呼び覚まします。もし養育者がより強圧的に抑圧をするなら、相手は人間としての尊厳を傷つけられたと感じてしまい、文化に順応させようとするすべての努力は無駄なものになってしまいます。人間の中の狼が目覚めますのです。

ツァーリズムの圧力のもとでは酒に酔ったように悪徳が燃え上がり、パッとしないさまざまの陰謀が企まれました。まだ活動性が残っていた人たちがいるところでは、人々は暴君の支配を転落させるための策略と暴力を準備しました。反抗的なならず者のグループが社会主義的な国家形成の中に流れ込んできました。イライラするから貴重な建造物を爆破したいなどと思って、社会主義の訓練を受けに来たりするのです。

個人への教育のためには、まずなによりも教育を受ける側の受け入れ準備が整っていなければなりません。これは個人心理学の研究の確実な成果なのですが、この受け入れ準備をととのえる作業は、暴力を使用したり、あるいは権威主義的な圧力のもとでおこなわれると、うまくゆきません。人間の精神は、主体として受け入れたもの、みずからの意思で選びとったものしか、継続的に心に残さないのです。ボルシェヴィズムのやり方は、拙劣で時代遅れの方法のあらゆる間違いを犯しています。たとえ彼らが多数派を暴力で押さえつけることにいくらか成功したとしても、押さえつけられた側には喜びがありません。それにふさわしい世界観をもっていない社会主義は、まるで人形のように、手足はあるにしても心はなく、自発性もなければ才覚もありません。ボルシェヴィズムが自分たちの仕事に成功したとしても、それでもなおそれは無価値なのです。まして、それが失敗したとなれば、それは社会主義の信用を失墜させ魅力を失わせることになってしまいます。

社会主義と共同体感覚

さまざまな国で社会主義は実現する以前の段階にあります。社会主義は、マルクスが予見したように、成長つつあるプロレタリア階級に対する資本主義的な圧力の結果おこります。プロレタリアートの劣等感が、みずからの存在への戦いの中で。克服者を克服するなんらかのやりかたを

探すのです。劣等感は、棘として、たえまない刺激として作用し、プロレタリアートは、よりよい組織のあり方、経済のあり方を見つけ出すのです。

しかし、大きな組織の経済学的なよりよい相互関係についての知識をわれわれはすでに作り出し持っているでしょうか。成長しつつある工業化によってプロレタリアートの経済状態がよくなっている今、革命的なプロレタリアートの勝利と、漸進的な社会民主主義の勝利とが、おのおの別のものだという考え方は確かなのでしょうか。それとも、それらの思考や感情や意図の間の一致した土台や前提とは、むしろ過去の慣習にもとづいた権利意識の強化、人間の共同生活に内在する論理そのもの、人間の共同体に対する疎外されない所属の要求こそがそれなのではないでしょうか。

いつであれ、ある人たちが他者に対して権力陶酔から不当な仕打ちをしているのを知ったら、個人であれ国民であれ、人間性感覚 *Menschenheitsgefühl* の全能を思い起こすべきです。人間性感覚のもっとも強力なアピールは、それが最高の法廷での永遠の真理だということの中にあります。これは科学的な真理でもないし弁論術の練習としての倫理でもありません。あるいは世界の出来事についての単なる道徳的な解釈でもありません。それらはすべて、ただのみじめな偽物であり、宗教的なものであれ幻想的なものであれ儀式でしかなく、人間の相互所属 *menschlichen Zusammengehörigkeit* の歴史的に制限された抽象化でしかありません。そうではなくて、人間の相互所属は、われわれが、日々刻々、真理として知っており、生命の歩みの中で身体でもって感じとっているものなのです。

羞恥心や、後悔や、嫌悪感や、不安感、その原始的な証拠ですし、性別はその生物学的な表現ですし、家族はそのためのもっとも失敗することの少ない教育機関なのです。よい家族はわれわれに子どもへの愛を植えつけます。子どもたちは養育の中でみずから決めた目標のために行動し、それを実現することを学びます。近親相姦や性的倒錯のような共同体感覚に対する明白な矛盾について、子どもたちはよい家族の中では自動的にその魔力から守られます。法律や道徳や技術や芸術や科学を子どもたちは家庭の仕事から学びますし、どうすればそれらを応用できるかも家族の中で相互所属の感覚を通じて学びます。相互所属の感覚はインスピレーションを導き、さまざまな構想や計画を通じて、進歩や発明を促します。

われわれは自分の中で活動している共同体感覚の働きを知っています。それがなければわれわれは窒息してしまうでしょう。そうなれば人の心は妄想的になってしまい、明白に証明された論理さえわからなくなるでしょう。たとえば、自殺を考えてみますと、そこでは、生命の本能に反抗して、権力追求が勝ってしまうのです。生命の本能の論理は共同体と同じように現実的です。自殺は間違いであり、自然に反し、共同体の最も高い精神にも反する罪です。

共同体精神を押さえつけることはけっして簡単なことではありません。犯罪者は、共同体感覚をなだめるために、行為の前か後に犯罪に酔うことが必要です。非行少年は非行仲間の中に自分自身を閉じこめることで、仲間に対して責任をとっているという感覚をもとうとしますし、そうして罪の意識をやわらげようとします。ラスコーリニコフは、最初に朝の間中ベッドに横たわって、ナポレオンになるかシラミになるかを考え続けました。それから老いた金貸し女を殺すために階段を上りながら、動悸を感じたのです。この動悸という血液の興奮を通じて、共同体感覚が語りかけているのです。

戦争は他の手段を用いての政治の続きではありません。そうではなくて、人類の共同所属への巨大な集団的悪行なのです。抑圧された人間の激しい怒りの声を押さえつけるためには、どれほどたくさんの嘘と人工的な挑発と下劣な情熱と千回もの暴力が必要でしょうか。社会主義はもっとも深いところでは共同体感覚に根ざっていて、人間の根源的な叫び声であり、さしあたって共同体精神のもっとも純粋なもっとも実用的な表現なのです。

しかし、ボルシェヴィズムは、社会主義の自殺、共同体精神の自殺です。ヘラクレスは蛇ではなくて母親を絞め殺してしまいました。なんという精神と文化と人間の血の無用な消耗でしょう。わかりやすいように申し上げますか？「われわれは外的な形式がほしいわけではない。われわれは魂がほしいのだし、社会主義の新しい言葉がほしいのだ。これがそれだ。共同体感覚の育成と実現！」

育児や教育と人類の未来

狭い子ども部屋にも社会の権力追求の波が侵入します。親の支配欲、家庭内での不当な役割分担、小さい子どもの特権的地位などが、子どもの心を権力と主導権の獲得に向けて抵抗しがたく追いやり、権力の座だけが魅力のあるものだと思込ませしてしまうのです。子どもの心が共同体感覚の最初の流れに出会うのは、多くの場合、すでに権力欲が形成され、その支配のもとにあるときなのです。

精密な分析によってわかることは、すべての性格は、私的な優越性への追求を通じて作られはじめますが、共同体精神がそのためのゆるぎのない前提となるように導くことができます。子どもが学校あるいは社会に入っていくときには、家族からすでに何度も何度も聞かされた、共同体精神に対して有害なメカニズムをたずさえていくのです。私的な優越性の理想は他者の共同体精神による奉仕を計算に入れていきます。ですから、われわれの時代の典型的な理想像は、いまだになお孤立した英雄であり、その人にとっては仲間は客体でしかないのです。この精神構造が世界戦争を人々の口に合うものにさせ、勝利した将軍たちは偉大なのだと根拠もなく賞賛させているのです。

共同体感覚は別の種類の理想を必要としています。それは聖なるものでありますが、幻想的な迷信の残骸を残さないものでなければなりません。学校においてであれ人生においてであれ、自分自身の価値のために他者の犠牲においておこなわれる、頑固で誇張された目標追求を、後からでも取り除くことができます。そのような目標追求は粗大なごまかしであるにすぎず、権力陶醉はただその人自身にとってだけ価値があるものであるにすぎません。

集団は同じ目標を通じて結び合わされますが、集団心理の中では個人の責任の感覚は本質的には減少しますので、ときにこれは壊滅的な作用をします。ボルシェヴィズムにおいては、神のようであろうとする目標追求が一度は勝利を収めました、おそらくこれが最後の回でしょう。しかし人間の野心はいつかまた別の実験を企て、個人の縮小を夢見て、全体のために個人を滅却することを、永遠の真理として人々に思い込ませようとするかもしれません。

おわりに

個人心理学の研究とその上述の成果については、今日、以前よりもいっそう、適切であり証明されたものになったと主張してもかまわないと思います。われわれの見る限り、個人心理学の見地が勝ち得たほどの、われわれの時代の精神的混迷の全体像を純粹に明確に見わたせる見晴台はありません。個人心理学は大戦のすぐ前に、将来の生活感覚への目標として、次のように宣言していました。「科学精神、責任感、相互扶助を潜在的な悪意にとってかえること」。

この、あるいは似たような、要求でもって到達することができる、あるいは到達すべきものは、言い当ててみるのが難しくはありません。われわれは、強い共同体感覚を意識的に準備し促進

すること、個人についても諸国民についても暴力への渴望を完全に除去することを必要としています。ボルシェヴィズム的な方向性はこの意味においても障害物であり悲劇的な誤りなのです。

訳者コメント

これはアドラーの *Borschewismus und Seelenkunde*(1918)の翻訳です。第一次大戦が終わった直後の論文で、この論文のなかで共同体感覚ということばがはじめて出てきます。出典はチューリッヒで発行されていた政治雑誌 *Internationale Rundschau* です。この文は、*Psychotherapie und Erziehung*. Fischer, Frankfurt am Mein, 1982, Band 1,23-32. から訳出しました。アドラーの悪癖で、話があちらへ行きこちらへ行きしますが、丁寧に読んでいただければ、きわめて今日的な話題が語られていることがおわかりになると思います。

更新履歴

2013年5月1日 アドレリアン掲載号より転載